

「海雀」(北原白秋)の教材研究

秋田大学教育文化学部附属小学校 熊谷 尚

6	5	4	3	2	1	
						海雀
				海雀、海雀、		北原 白秋
			波ゆりくればゆりあげて、	銀の点点、海雀、		
		波ひきゆけばかげ失する、				
	海雀、海雀、					
銀の点点、海雀。						
	A	B	A			

I 構成

この詩は、6行から成っている。各行の音数を見ていくと、次のようになっている。

1行目	5・5
2行目	7・5
3行目	7・5
4行目	7・5
5行目	5・5
6行目	7・5

内容・形式の両面から、全体を三つの部分に分けると、次のようになる。

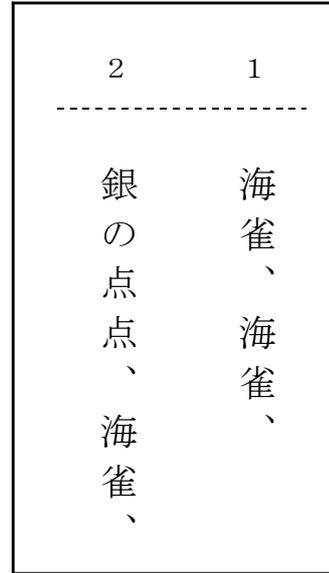
【1・2行】語り手の眼前に無数の海雀が点在していることが謳われる。

【3・4行】波のうねりに伴って見え隠れする海雀の姿が謳われる。海全体の雄大なイメージが広がる。ここがこの詩の山場である。

【5・6行】初めの2行のリフレインである。音楽の「二部形式」のように、詩全体が2つのフレーズから成り立っている。はじめと終わりがリフレインになっており、A|B|Aの構成を取っている。五五調、七五調の簡潔で的確な情景描写により、小さいもの、愛らしいものへの愛情や、雄大な自然への畏敬の念が表現されている。

II 技法・語句

i 体言止めの多様 ii 漢字表記の多様



体言止めには、その語を提示し強調する効果がある。「海雀」が3回繰り返されることで、より一層読み手に印象深く残る。繰り返されていることで、語り手は一羽ではなく、何羽もの海雀が語り手には見えていることが想像できる。また、「海雀」という漢字表記の字面が、波間に浮かぶ海雀の姿そのものを表現しているようにも思えてくる。体言止めと漢字表記の相乗効果によって、読み手は海雀の姿をイメージ豊かに想像することができる。

iii 「銀の点点」という比喩

波間に浮かぶ海雀をこう表現したのである。隠喩である。

『日本国語大辞典 精選版』（小学館 二〇〇六年）には次のようにある。

海雀 ↓ ウミスズメ科の海鳥。全長約二五センチメートル。体はよく肥り、尾羽が短い。背面は青黒色で腹部は白い。千島、北朝鮮などで繁殖し、冬から春にかけて日本各地の海上にみられる。魚群を見つけると群をなして集まる。

辞書の中に「腹部は白い」とある。また、「魚群を見つけると群をなして集まる」とある。これらのことから、「銀の点点」は、海雀のことであることが推定できる。

「点点」から、どれくらいの数海雀をイメージできるだろうか。群をなして集まるのは魚群を見つけた時である。しかし、それ以外の時もある程度群れを成して棲息していると思われるので、かなりの数の海雀が視界の中にはいるのであろう。語り手の視界には数十メートルから数百メートルの海が広がっており、その波間にたくさんの数の海雀が見え隠れしているのであろう。

「点点」を「点々」表記しなかったのは、なぜだろうか。

語り手（ないしは虚構の作者）は、大海に比べると点にしかすぎない海雀一羽一羽に思いを寄せていた。どの点（どの海雀）も一つとして同じではなく、まぎれもなく一羽一羽を別の海雀だと感じていたのである。だから、「点々」という省略した形ではなく、「点点」と表現したのではな

いだろうか。

例えば、子どもたちが公園で遊んでいる様子を「子供たちが遊んでいる」と表現するのと、「太郎と次郎と花子が遊んでいる」と表現するのでは、語り手の思いが違う。そういうことであろう。

iv 句読点

句読点を使わない詩も多いが、この詩は、一言一言に読点が付いている。それによって、間が生じ、全体的にゆっくりとした調子になっている。

また、6行目の最後の句点からは、語り手が感動の余韻に浸っているような様子さえ感じられる。

v 対句

4	3
波ひきゆけばかげ失する、	波ゆりくればゆりあげて、

対句の音声的な効果として、独特のリズム感がつくり出されることが挙げられる。また、意味的な効果としては、

- a 両者のコントラストを際立たせる。
- b 同傾向の特徴を強調する。

の両面が挙げられる。この詩では、aの効果が出ている。

「来る」なので、語り手の方に近づいてくる波。寄せる波。

波ゆりくれば ゆりあげて、

波が海雀をゆすって上げる。語り手に海雀の姿が見えている。

しに寄せては返す波の動きや音、波とともに現れては消え、消えては現れる海雀の姿を表現するのに、リフレインが効果的に働いている。

また、リフレインは、語り手の心情の高まりを示していると考えられる。

Ⅶ 文語体

文語とは、平安時代の語法をもとにして発達した書き言葉である。現代では話し言葉としては用いない特殊な言葉である。この文語で書かれた詩を「文語詩」という。これに対して、現代語で書かれた詩を「口語詩」という。文語体の詩は、明治時代で終わって大正時代からは口語体で書くのが普通であったが、口語詩とともに優れた文語詩を書いた詩人もいた。北原白秋もその一人である。

viii 視覚的構成

この詩は、詩全体の視覚的構成が工夫されている。それをとらえやすくするために、試みとして、次ページのようにして詩の書き換えを行ってみた。

アは原文のまま、イは熊谷が書き換えたものである。まず、〈海雀〉という言葉の配置を見てみる。イは、七五調のリズムをもとに改行を行ったのであるが、そのようにすると、〈海雀〉が横一列に単純に並び、変化に乏しくなる。しかしアの原文では、〈海雀〉が上下に配置されている。波間に点を漂っている海雀の姿そのものを、画数の多い漢字表記によって視覚的に表現していると言えるのではないだろうか。また、アの原文では、3、4行目に平仮名表記を用いて、一行の長さを他の行に比べて長くしている。詩全体を一枚の絵のように見てみる。語り手の眼前に広がる海、寄せては返す波が、行の長さの違いを出すことで視覚的に表現されていると見ることはできないだろうか。イのように書いた場合と比べると、その視覚的な要素からくるイメージはだいぶ違うように感じる。アの方が、波が高い海をイメージさせはしないか。しかし、平仮名表記であるせいか、そんなに荒々しい感じではなく、どこかゆったりとした感じがするから不思議である、雄大な海と、小さく愛らしい海雀の姿が対比的にイメージされてくる。

このように、この詩では、漢字表記・平仮名表記の使い分けと改行により詩全体の視覚的構成を工夫し、一枚の絵を見るように、読み手に豊かなイメージをもたらすことに成功している。

ア

海雀、海雀、
銀の点点、海雀、
波ゆりくればゆりあげて
波ひきゆけばかげ失する
海雀、海雀、
銀の点点、海雀。

イ

海雀、
海雀、
銀の点点、
海雀、
波ゆりくれば
ゆりあげて
波ひきゆけば
かげ失する
海雀、
海雀、
銀の点点、
海雀。

ix 語句の意味

〈ゆりくれば〉

「揺る」の連用形＋「来」の已然形＋「ば」。「ば」は古くは確定条件を表したが、ここでは「…すると」の意味で用いられている。「ひきゆけば」も同様。

〈ゆりあげて〉

ゆりあぐ（他動詞・ガ行下二）
揺り動かして上げる。ゆすって上げる。揺すぶり上げる。

〈ひきゆけば〉

「引く」の連用形＋「行く」の已然形＋「ば」。

〈かげ〉（影、陰、蔭、翳）

- (1) 日、月、灯火などによって、その物のはかにできるその物の姿。
- (2) 光によって、その物のほかにできる物の姿。
- (3) 水や鏡の面にできる物の形や色。
- (4) 光をさえぎったために光源と反対側にできる暗い部分。
- (5) うすくぼんやりと見えるもの。
- (6) 物の姿。
- (7) 物の後ろの、暗いまたは隠れた所。

〈失する〉

「失す」（自動詞・サ行下二）

- (1) 消える。なくなる。
- (2) 見えなくなる。行方不明になる。
- (3) 紛失する。
- (4) 死ぬ。
- (5) 「去る。来る。居る」をいやしめていう語。行きやがる。来やがる。↓ うせる

III 主題

雄大な自然への賛美と、その中でけなげに生を営んでいる海雀に対する愛情。